

■身体的ハンディキャップにおける訓練(2/3)

バイロンのこのような話を聞くと、ほんとうに悲しい同情心を覚える。というのは、「こうした苦々しい心は、本人を苦しめ、むしばむばかりか、世の人々すべてに対して苦々しい思いを抱かせる」というような内向的な自己反省から彼を導き出し、「足なえさえも獲物をかすめ奪う」というイザヤ書の約束に目を向けさせることができたならば、と思うからである。

バイロンやまた彼と同じような何千という人々に、ぜひとも聞かせたいあかしがある。その人は肉体に一つの「とげ」を持っていた。それが何であったかは明らかにされていないが、とにかく言いようもないむごい「とげ」であった。彼は神がその「とげ」を取り去ってくださるよう、熱心に祈り求めたが、聞き入れられなかった。しかし彼は、それが取り去られることよりもさらにまさった喜びがあることを学んだ。彼がまだ地上にいたら、バイロンにも喜んでそれを教えたであろう。彼はそのことを、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」というみことばを通して、主イエス・キリストから学んだ(Ⅱコリント 12:9)。それゆえ彼は、内なる喜びにあふれてこう言うことができた。「ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」(9, 10節)。

キリストの力が私に宿るように、私に対する恵みが十分であることを知り、弱いところにキリストの力を完全にあらわしていただき、自分の弱さを誇り、弱いときにこそ強くある—これこそ、ハンディキャップにおける訓練である。これこそ「とげ」に対する勝利であり、苦難に打ち勝つ歌であり、懲らしめを喜ぶ喜びであり、恵みを誇ることであり、ハンディキャップの敗北なのである。

足のなえた者は王に近づくことができ、王の特別の配慮を得ることができる。ダビデが若いころヨナタンと結んだ誓いのゆえに、その子らに助力を惜しまなかった物語ほど美しい話がほかにあるだろうか(Ⅰサムエル 20:14-16、23:18、Ⅱサムエ

ル 21:7)。ダビデ王は、ヨナタンの子のひとりでメフィボシェテという「足の不自由な」息子が残っていることを知った（Ⅱサムエル 9:3）。王は彼を愛し、心を配ってやさしくいたわり、必要なものを与え、王とともに食卓に着くことさえ許した。

「メフィボシェテはエルサレムに住み、いつも王の食卓で食事をした。彼は両足が共になえていた」（13 節）。確かにメフィボシェテは足が不自由であったが、特別に王宮に住むことができた。弱かったが、王とともにあった。足はなえていたが、ダビデの愛を一身に受けた。身体は満足ではなかったが、王と食事をともにすることができた。そうであるなら、ダビデの子となえられる私たちの栄光の主が、身体的ハンディキャップを負った者に対して、ダビデよりも深い愛を注いでくださらないであろうか。

らい病人は王に奉仕することができる。彼らは人々の住まいから遠く離れて住み、「汚れた者」という烙印を押され、人々に忌み嫌われ、自分自身にとっても他の人々にとっても忌まわしい害毒であると思われた。しかし、サマリヤの人々に朗報をもたらす役目を果たしたのは彼らであった（Ⅱ列王 7 章）。敵軍が退却して、激しいききんに悩むサマリヤの人々のために余るほどの食糧が手に入るようになったとき（これは神がそのしもベエリシャに約束されていたことである）、それを知らせるために、神はらい病人たちをお用いになったのである。

「あすの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉 1 セアが 1 シェケルで……売られるようになる」という神の約束が、あまりにも途方もないと思えたので、ひとりの副官は、「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか」と抗議した（1, 2 節）。全能者はまことに「天の窓」を持っておられる（マラキ 3:10）。貧しい者にそこから祝福を注ぎ込まれるためである。しかし、神はその窓をあけさせる役目を、役に立たないと思われる者、身体的ハンディキャップを負う者にお与えになるのである。ここに出て来る四人のらい病人は、神の約束が成就するように、王とその国を導いた。人目につかないような人にも活躍する機会があり、無能者と言われる人にも貢献できる道がある。取るに足りないと思われる人でさえ、神と人に奉仕することができ、欠陥のある者でさえ、天の窓を開く手伝いができるのである。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第九章「身体的ハンディキャップにおける訓練」より】
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい